

特集「ネットワークⅣ」の発行に寄せて

奥村 祐之

2020年は予期せぬ新型コロナウイルスの影響により、東京オリンピックのイベントでの華々しい5Gサービスの利活用シーンのお披露目という従来のシナリオは消失し、2020年2月に開催予定であったMWC（Mobile World Congress）は急遽中止となり、CES（Consumer Electronics Show）等の世界の著名なイベントも今後オンラインにて開催される方向になっている。今は可能な限り日常の密の状態を避ける働き方の改革に世の中は注目しており、この流れによって法人企業は変革を余儀なくされ、オフィスの在り方から業務の在り方までWithコロナ時代に即したニューノーマルな形態として定着していくものと考えられる。テレワークやオンラインイベントを始めとするリモートコミュニケーションが増える中で通信のトラフィック量も増加しており、通信事業者も法人企業もネットワークインフラの強化を行いつつ、場所や時間にとらわれないシステム基盤作りを進めている。

また、経済産業省が提唱している『DXレポート～ITシステム「2025年の崖」克服とDXの本格的な展開～』に描かれているように、IT人材の減少や熟練世代の高齢化/離脱が進む中でデータドリブンを実現する基幹システムの刷新にて効率化や省力化といった課題に立ち向かわなければならない時代を迎えている。ITインフラ自体もオンプレミスとクラウドを適材適所で使い分けることが当たり前になっており、複雑/多様化するインフラに対して可視化や自動化、更には予見措置を実現できる機能実装が必要となる。そうした環境下でネットワークは様々なデバイスやサービスをつなぎ、自在にデータの利活用をできる共通のインフラとして整備されていき、実際の形態に合わせたセキュリティや認証も非常に重要な実装要素となる。

2020年代にはIoT（Internet of Things）の本格的な普及により、これまでの人と人とのコミュニケーションに人とモノやモノとモノのコミュニケーションが加わり、そこに新たな顧客における価値が生まれる時代が到来する。ネットワークの観点ではWi-Fi 6や5Gを始めとするワイヤレス関連技術やNTTのIOWN構想でも注目されているオプティカル関連技術の進化が牽引して、増加するコミュニケーションのニーズを支えていく形になる。2025年に開催される大阪万博では「いのち輝く未来社会のデザイン」をテーマとしているが、Society 5.0の実現に向けて、現在進化/変革している技術要素が更に成熟した形でこれからのスマートな社会基盤の中に活かされていることを期待したい。

前回のネットワーク特集より5年が経過して、通信事業者の基盤もクラウドネイティブ化、オープン化が更に進む方向にある。法人企業も高度化するクラウドやワイヤレス、更にはDX技術を駆使してビジネスのデジタル化を加速する方向にある。

これまでのビジネススタンダードを軸にしたデジタル戦略は変化を繰り返し、企業は従業員の働き方にも追随した「安全性」と「俊敏性」、「柔軟性」を伴うネットワークインフラ対策にも追われることになる。インテグレータ各社はこの変化に対して、ビジネスエコシステムを醸

成しながら総合力をもって顧客価値を追求していく時代に入っている。今号ではネットワークに関してキーとなる技術動向や関連する弊社の取り組みを紹介する。今後のネットワークインフラの検討に向けて参考になれば幸いである。

(ユニアデックス株式会社 テクニカルサポートセンター長)